



第十一回
東京稀音會

令和六年五月十二日(日)

午後一時 開場

午後一時半開演

紀尾井小ホール



唄

三味線

囃子

桃太郎

| | | | | | | | | |
|-----|------|-----|------|----|----|----|---|---|
| 稀音家 | 光 | 稀音家 | 六三土里 | 笛 | 福 | 原 | 友 | 裕 |
| 稀音家 | 清 | 松 | 永 | 忠 | 三郎 | 小鼓 | 梅 | 屋 |
| 稀音家 | 六千津 | 稀音家 | 佐 | 千世 | 小鼓 | 田 | 中 | 佐 |
| 稀音家 | 六芙沙代 | 稀音家 | 観 | 子 | 大鼓 | 望 | 月 | 左 |
| 稀音家 | 六四松 | 稀音家 | | 和 | 太鼓 | 望 | 月 | 秀 |
| | | | | | | | | 幸 |

この曲は、明治三十九年（一九〇六年）七月長唄研精会第四十三回にて開曲されました。作曲は前半「勇みに勇む桃太郎」迄が四代目吉住小三郎（吉住慈恭）、後半「かいがいしくも出で立ちし」より三代目杵屋六四郎（稀音家浄観）で、作詞は黒田撫泉です。三井養之助夫人より、五大噺を長唄化して子供でも唄えるように試みたらというお話を受け、花咲翁・かちかち山・舌切雀・猿蟹合戦・桃太郎を研精会で毎会五回に渡って発表しました。曲は本調子「昔むかし爺と婆の」で始まり桃太郎の鬼退治出發、二上り「さあさ掲げつけ黍圍子」、「かいがいしくも出で立ちし」より本調子、「船のともづな」の舟歌があつて鬼が島の立回り、鬼の降参、二上りになつて「宝車に七車」と宝物を積んで凱旋して終曲になります。

唄

三味線

蓬

菜

稀音家 六紗代

稀音家 六四沙代

稀音家 康三朗

稀音家 観子

天保元年（一八三〇年）から弘化元年（一八四四年）に掛けて四代目杵屋六三郎（後の初代杵屋六翁）が作曲した曲で作詞者・作曲年代・初演の場所などが一切不明とされています。所説ありますが、四代目杵屋六三郎の家が火災に遭って新築した時の祝いの曲で、天保七年（一八三六年）の作曲とされています。

曲名の「蓬莱」とは、中国の伝説で三神山の一つで山東半島の東方海上にあり、仙人が住む不老不死の地とされる霊山で「蓬莱島」・「蓬莱山」・「よもぎがしま」と呼ばれています。我が国では昔から蓬莱をかたどって作った台の上に松竹梅、鶴亀、厨妣しやうばを配してご祝儀の飾り物に用いた、いわゆる「蓬莱の島台」です。

内容は、遊郭を不老不死の蓬莱山に、つまり桃源郷に例え遊女を仙女に見立てています。曲は、二上りで前弾きがあり「麗らかな日の色染みて」で始まり、賑やかで華やかな気分をだし、本調子になって「菘の白露」、「招く薄は」と端唄の「しよんがえ節」の軽いリズムになります。「しよんがえ節」とは元禄期から明治にかけて深川で流行したものと伝えられていて、一節の最後に「しよんがえ」という囃子詞が入るもので、今でも各地の民謡に残っています。

唄

三味線

囃子

花見踊

稀音家 清 水
 杵屋 正 一郎
 稀音家 六 四 次
 稀音家 六 光 好

稀音家 宣 一 朗
 稀音家 六 柁 介
 稀音家 六 泰 介
 稀音家 六 美 春

笛 福 原 友 裕
 小鼓 藤 舎 英 心
 小鼓 田 中 佐 幸
 大鼓 望 月 左 太 晃 郎
 太鼓 藤 舎 呂 近

明治十一年（一八七八年）六月、新富座新築落成の開場式の余興として上演された曲。作詞者は竹柴瓢助、作曲者は三代目杵屋正治郎で、本名題を「牡丹蝶扇形^{はなだにちょうせんかたち}」で、通称を「花見踊り」とも言います。曲は二上りの通しで、時代的に最も華やかだった元禄時代の花見風景を描いたもので、上野の山に花見に集まる丹前侍、供の奴、湯女、町娘などが踊り騒ぐ様を描いています。「よきこと菊の判じもの」というのは、当時人気の団十郎、菊五郎のデザインを小袖に描いたもので、「たんだふれふれ」「ざざんざ」という言葉がでてきますが、この「ん」は調子言葉で意味はありません。「小袖幕」は小袖を繫いで幕にして「花見幕」として場所を仕切ること。「武蔵野」は広いことにかけて大きな杯の事、「和田酒盛」は立派な杯の事です。

明治と時代が変わって正治郎は、合方に三拍子のリズムを取り入れるなど、洋楽の影響も示しながら新たな時代への移行を暗示した曲ともいえます。

鉢
の
木

| | | | |
|-----|-----|-----|----|
| 稀音家 | 六田嘉 | 稀音家 | 七重 |
| 稀音家 | 六茂江 | 稀音家 | 一宣 |
| 稀音家 | 六美夏 | 稀音家 | 和 |

この曲は、明治三十年十一月（一八九七年）三代目杵屋六四郎（稀音家浄観）の作曲で、作詞者は可奈女とあります。能の四番目物「鉢の木」を材にした曲です。曲は、本調子謡ガカリ「雪は驚毛に似て飛んで散乱し」で始まります。北条時頼が僧形で微行廻国の途次、上野佐野で大雪にあい一夜の宿を借りましたが、貧しい宿の主が寒さに暖を取って客僧をもてなす為、愛蔵の松梅桜の鉢の木を焚きもてなします。主は本領を押領され現在身は不遇となりましたが、鎌倉に事があらば真つ先に馳せ参ると語り、名を問われ佐野源左衛門常世と告げました。時移つて鎌倉の軍勢集めがあり常世は約束通り一番に到着しました。時頼は一番到着を褒め、又常世は先夜の鉢の木の礼として加賀の梅田・越中の桜井・上野の松枝の三の荘と本領安堵を賜つたという内容です。明治三十六年一月の第五回研精会で初演されました。

唄

三味線

離子

翁千歳三番叟

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|---|----|----|-----|---|----|---|----|---|---|---|
| 東 | 音 | 皆川 | 健 | 稀 | 音家 | 六 | 四 | 郎 | 笛 | 福 | 原 | 友 | 裕 |
| 稀 | 音家 | 光 | 稀 | 音家 | 三 | 穂 | 一 | 頭取 | 望 | 藤 | 舎 | 英 | 心 |
| 稀 | 音家 | 康 | 三 | 朗 | 稀 | 音家 | 宣 | 一 | 朗 | 胸先 | 梅 | 月 | 秀 |
| 杵 | 屋 | 正 | 一 | 郎 | 稀 | 音家 | 六 | 泰 | 介 | 大鼓 | 藤 | 舎 | 呂 |
| 稀 | 音家 | 四 | 郎 | 五 | 郎 | 上調子 | 松 | 永 | 忠 | 三 | 郎 | 中 | 佐 |
| | | | | | | | | | | | | | 幸 |

この曲は『邦楽年表』安政三年の項に「翁千歳三番叟 杵屋六左衛門曲」とありますが、秋葉芳美の説に文政八年九月河原崎座の序開きに「式三番叟」が上演され大薩摩文太夫と前名三郎助名義で六左衛門が演奏しているとあるので、この頃から曲は存在したかと思われます。作曲者は外記節の復活を心掛け、外記節三部作（「猿」・「傀儡師」・「石橋」）があり、本曲もこの外記節復活運動の一環として作曲されたと思われます。曲の中に外記節の手が多く使われているところから「外記三番」とも呼ばれています。尚「三番叟」に皐月歌の「これのんなんな池の汀に」は外記節「泰平住吉踊」の「堺浦には」の旋律が使われています。「四海波風」以下は六左衛門の創作です。このように外記節・河東節・半太夫節などに範を取って巧みに長唄化し、あくまで謡の莊重を失わず、推敲研鑽の結果この作品が生まれた訳で、十代目六左衛門の作品中で最も最高の曲であると存じます。

賛助出演

東音 皆川 健

杵屋 正一郎

松永 忠三郎

田中 佐幸

望月 秀幸

梅屋 喜三郎

藤望 月左太晃郎

福原 友裕

構成・演出
進行

浜口哲夫
羽田夏子

東京稀音會

〒151-0053

東京都渋谷区代々木 4-52-3

TEL 090-8513-5312

※次会は令和7年5月25日(日)でございます。